

越後の法螺吹き名人

高橋 実

むかしあったてんがな。

ちようど秋も深まって、今年も稲も畑の野菜も豊作で一段落したところのことだったいの。そのころ、日本中のほら吹きが江戸に集まって法螺の吹き比べをしていたてんがの。越後の柏崎からその名人が江戸へ出かけて行ったてんがの。

江戸の宿屋へ着くと、へえ、法螺比べがはじまっていたてんがの。奈良と大阪のほら吹きだったと。ちようど秋で大根だの茄子だのいっぺ<sup>(1)</sup>こと出来るころだったと。

初め大阪の法螺吹きが奈良の法螺吹きに質問したと。

「奈良さん、奈良さん。お前とこの名物は何がありますかの」

「奈良といえは日本一の大仏が名物だこて。大仏様はあんまりでつかいんだんが、人が長く見上げると、首が痛くなるぐらいでつかい仏様だ」

「奈良の大仏様のことは、大阪のうちらでも聞いたことがある。なるほどでつかい仏様という話だの。だろも、それだけしか奈良には名物がないがだろかの」

「いやいや、そんげ<sup>(2)</sup>のもんじやないぜ、おらほうには、秋になるとでつかい茄子がなるがんだぜ。この茄子てや長さが二丈や三丈もある茄子で、この茄子もぐどときには、村中の人が出なけやとてもじゃねえが、もがん<sup>(3)</sup>ねえ。今年ももぐどとき、その下になって人が二人も三人も下敷きになって大騒ぎだったぜ」

「へえ、また奈良てやなしたでつかい茄子がなるとこだの。そんげの茄子おら見たこともねえ」と大阪の法螺吹きはたまげたと。

こんだ奈良の法螺吹きが大阪に聞くがんだと。

「そんげのことだけや、大阪さん、お前さんの国ではいったい何が名物なんですの」

「いやあ、おら方は大した名物もねえろも、しいて言えば、大阪牛てがなが、名物だこての。この牛のでっこい<sup>(4)</sup>ことは、奈良の大仏様を横にしたような牛で、牛の手綱を引いていと、尻尾がめえなくなるてがんだぜ」

と大阪の法螺吹きは答えるてがんだと。また奈良の法螺吹きが聞くがだと。

「おらほうでは、秋になるとでっこい茄子がとれるがんだが、大阪じゃあ秋になると何がとれるがんだい」

「おら方ではでっこい大根ができる。その大根のでっこいことといたら直径が一間もあるし、長さは何丈あるやら。その大根掘るときにあ、村中で大騒ぎして、それが倒れるとき村中が逃げないと人の三人や五人下になってつぶれてしまう。今年も大根引きで、人が

下になったでがんで。大騒ぎだったぜ」

こうして大阪と奈良の二人の法螺吹きが法螺吹き話していたてんがね。だるも越後の法螺吹きはさつきなから黙って聞いていてなんにも話をしねえがんだと。だいたい越後の人でや昔から口下手でいつも黙っていて、居るんだか、居ねんだかわからんぐらいおとなしい性格の人ばっかだっただと。せっかく江戸まで来て、越後の法螺吹きは何も法螺も吹かんで帰るだろうかと思うて、奈良の法螺吹きが聞いてみたよ。

「越後さん、越後さん、お前さんはさつきなから黙っているろも、越後の名物てやなにがあるんだい」

そつでも黙っているんだんが、越後には奈良や大阪のような名物はないんだろるかと思つてしていると、やつと口を開いたよ。

「おら方じゃお前さん方のようなでつかい話はねえども、米山という山がある。」

「それはどんげの山なんだね」と聞くと

「米山というのはコメのヤマと書いて、お前さん方のようなべとで出来た山じゃねえ。米の山て書くがんで、山のとっじょうまで米でできている山で、海のそばからすぐ出来ていて、千メートルもある。そんげに高え山だ」

「ああ、越後は米の国だすけ、そんげの山があるかも知らんの。あつても不思議でねえこの」

「それだけじゃねえぜ。麓の越後平野は、全部米を敷き詰めてあるがんだぜ」

そついうて自慢こき始めたよ。

こんだ大阪の法螺吹きが聞いたよ。

「そら米山のことわかつたども、そうだるも米なんか頂上までどうやつて運ぶんだい。」  
「そら大阪のお前さんのどこに、でっこい牛がいるねか。大阪の牛頼んで背中に米を山ほど積んで持つてきちゃ積むがんだ。だすけ大阪の牛はおら方じゃコメ積みに使つてているがんだ。大阪の牛なんかおらほうにすれば、子どもが牛のけつをピシャンピシャンと叩いて山の上まで運び上げるがんそ」

大阪は「そらあそつだの」と自分で言いだしたことだんが嘘じゃなんていわんねえ。黙つて聞いていたよ。ほうしてまた聞いたよ。

「米山の話はわかつたども、越後の名物はそれだけかい。まだほかの名物はないんですかい」

「いやあ、ほかにたいして名物もねえろも、その米山のコメの頂上にでつかい太鼓がある。三階節という歌があるが、《米山さんから雲が出た 今に夕立が来るやらピツカラシャツカラ、ドンガラリンと音がする》というこの歌 これがまあ、日本一の太鼓でズドンとはたくと日本中に響き渡つてその振動で麓の家が二、三軒も吹つ飛んでしまふ」

「へえー家が吹つ飛ぶようなでつかい太鼓かの。その胴は何で出来ているもんです」

と奈良の法螺吹きが聞いたと。

「そらあお前さんどこに茄子ができるでしょうの。その奈良の茄子乾かして刳り貫いて胴にしているがんだて」

「それはわかった。そうすると叩くバチがねえねか」

「そつれあ、今大阪さんがいうたでっこい大根。大根乾かしてから、それがおらほうの太鼓のバチになるがんだ」

「そらあ面白い。でっこいバチになるこての。そのバチもいいが、じゃあ、それ叩く人間はどんな人だい」

「ばかそんげのがん 奈良の大仏さんが叩くに決まっているこてや」

そういったんだんが、奈良のほら吹きも大阪のほら吹きも話をみんな越後の法螺吹きに取られてしもうて、なんにも言わなくなったてんがの。ほうして越後の法螺吹きがとうとう勝つてしもうたと。これでいきがぼーんとさけた。

(1) たくさん

(2) そのような

(3) とれない

(4) 大きい

(5) 土